沖縄県におけるHIV 検査へのアクセスとその関連要因に関する調査:在沖外国人と日本人の比較

「在留外国人に対するHIV 検査や医療提供の体制構築に資する研究」班

研究分担者 Tran Thi Hue 神戸女子大学文学部国際教養学科専任講師
研究代表者 北島 勉 杏林大学総合政策学部教授
研究分担者 沢田 貴志 神奈川県勤労者医療生活協同組合港町診療所所長
研究分担者 宮首弘子 杏林大学外国語学部教授
研究協力者 仲村秀太 琉球大学医学部助教
研究協力者 新里尚美 沖縄県感染症診療ネットワークコーディネーター

研究要旨

近年、在留外国人が急増している中、外国人の間でのHIVや結核などの感染症の広がりを管理することは重要な課題となっている。現在、国内の新規HIV感染者数は減少傾向にあるが、外国籍については横ばいであり、AIDS発症により感染が判明割合は上昇しており、2020年は29％であった。

沖縄は国内唯一の亜熱帯地域に所在する県であり、外国からのインバウンド観光客は年間200万人を超え、今後も海外からのインバウンド観光客の増加が見込まれる。さらに、全国的に在留外国人が増加する中で、沖縄県においても、外国人労働者が増加しており、2020年10月時点の外国人労働者数は10，787人で、過去最高となった。この急増は、主に技能実習、留学生の資格外活動の増加に牽引されている。彼らの多くは性的に活動な年齢層であり、母国とは異なる生活および医療環境などから、HIV 感染リスクが高くなる可能性がある。上記の観点を踏まえると、沖縄県における在留外国人の保健行動やHIV 検査受検のアクセスの状況及びその関連要因を把握した上で、受けやすいHIV 検査を提供し、HIV 検査受診率を向上させることは急務である。

そこで、本研究班では、沖縄県の在留外国人 473 人と日本人 277 人を対象に、保健行動、HIV 検査へのアクセスに関する質問等からなる質問票によるオンライン調査を行った。本調査に参加した者の特徴として、平均年齢は外国人が 31.1 歳と日本人が 34.4 歳であり、既婚の割合が両グループとも 50％ぐらいであった。性別について、外国人のグループでは男性が 68％、日本人のグループでは女性が61．7％を占めた。

調査結果から、沖縄でHIV 検査を受検したのは 35.5％であり、将来 HIV 検査受検に興味があると回答したのが約 50％と、高かったため、今後受検割合を向上することが期待される。また、調査で得られた結果から、HIV 検査受検を促進するために、外国人に対して引き続き HIV 自己検査方法と性感染症の検査、HIV 検査施設についての情報提供と地方で週末に受検できるHIV 検査会の開催が必要となることが示唆された。

A. 研究目的

近年、在留外国人が急増している中、外国人の間でのHIVや結核などの感染症の広がりを管理することは重要な課題となっている。現在、国内の新規HIV感染者数は減少傾向にあるが、外国籍については横ばいであり、AIDS発症により感染が判明割合は上昇しており、2020年は29％であった。

沖縄は国内唯一の亜熱帯地域に所在する県であり、外国からのインバウンド観光客は年間200万人を超え、今後も海外からのインバウンド観光客の増加が見込まれる。海外からの来訪者とともに沖縄におけるHIV感染拡大リスクが高まっている。

さらに、全国的に在留外国人が増加する中で、沖縄県においても、外国人労働者が増加している。沖縄県労働局によると、2020年10月時点の外国人労働者数は10，787人で、2010年の2，054人と比較すると、5倍以上に増加しており、過去最高となった（厚生労働省、2021）。国籍別ではベトナム人が23．9％で最多となっており、次いでネパール人が18．8％、フィリピン人が11．6％と中国人が9．1％の順となった。この急増は、主に技能実習、留学生の資格外活動の増加に牽引されている。彼らの多くは性的に活動な年齢層であり、母国とは異なる生活および医療環境などから、HIV感染リスクが高くなる可能性がある。一方、言語的問題、社会経済的問題、保健医療サービスに関する知識の欠如などの要因によって、HIV検査や治療などの保健医療サービスを簡単にアクセスすることができないといった課題は複数の調査研究で示されている。

また、沖縄県の報告によると、沖縄県における新規のHIV感染者数とAIDS患者数について、2021年末にHIV感染者16件、AIDS患者10件合計で26件が報告されており、過去3年間（2018年20件、2019年19件、2020年23件）と比較すると、感染が広がっている状況である（沖縄県、2021）。2020年の人口10万当たりの新規報告数でみると、HIV感染者は全国3位、AIDS患者は全国2位であった。外国籍の報告が限られているが、2015年には2件、2016年には1件、2020年には3件となり、微増傾向にある。

上記の観点を踏まえると、沖縄県における在留外国人の保健行動やHIV検査受検のアクセスの状況及びその関連要因を把握した上で、受けやすいHIV検査を提供し、HIV検査受診率を向上させることは急務である。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行後、沖縄県内の保健所でのHIV検査は停止状態が継続しており、その代替として検査協力医療機関においてHIV検査が提供されている。匿名ではあるが、検査協力医療機関数は限られており、有料でもあるため、国籍に関係なく、HIV検査へのアクセスへの課題を抱えていると考えられる。このような新型コロナウイルス感染症の収束が見透せない困難な状況において、HIV検査へのアクセスの状況とその関連要因における日本人と在留外国人共通の課題と在留外国人特有の課題を整理することができれば、HIV検査へのアクセスを改善する上で有用な知見を得ることが期待できる。

そこで、本研究では、沖縄の在留外国人と日

本人を対象として、保健行動やHIV検査へのアクセスの現状及びその関連要因を明らかにすることを目的とする。

倫理面への配慮

研究代表者が所属する杏林大学大学院国際協力研究科の研究倫理委員会からの承認を得た。また、調査を実施するに当たり、回答者からインフォームコンセントを得る。調査への協力は任意であり、調査に協力しない場合でも、調査において不利益は生じない旨を伝える。

B. 研究方法

本研究の対象は、沖縄県の在留外国人 473 人と日本人 277 人とする。調査方法は、外国人コミュニティや外国人をサポートしている NPO などの紹介を通じて、無作為に抽出する方法を採用し、オンライン調査を行った。

調査項目は①対象者の基本属性、②沖縄での生活習慣・健康状態、③主観的健康感、医療保険の加入、④性行為、⑤HIV検査への主観的アクセスである。

C. 研究結果

1. 調査対象者の基本属性

2023年01月30日から2023年03月13日までの期間に、研究に関する説明に同意し、オンライン調査に参加した者は750人(外国人473人、日本人277人)であった。調査協力者の属性は表1にまとめた。対象者の平均年齢は外国人が31.1歳と日本人が34.4歳であり、既婚の割合が両方とも50%ぐらいであり、短期大学・大学卒(54.3%と77.6%)と最も高かった。性別について、外国人のグループでは男性が68.8%、日本人のグループでは女性が61.7%を占めた。在留資格について、外国人のグループでは定住者が30.8%と、実習生が20.2%であった。居住形態については、友達と同居している者が63.6%と41.9%であり、最も多かった。健康保険に加入している者は76.9%と91.7%であった。

表1. 調査回答者の基本属性

属性	外国人 (n=473)		日本人 (n=277)	
	人数	%	人数	%
平均年齢	31.1		34.4	
性別				
男性	322	68.8	101	36.5
女性	129	27.3	171	61.7
男性から女性へのトランスジェンダー	6	1.3	1	0.4
女性から男性へのトランスジェンダー	6	1.3	3	1.1
その他	10	2.1	1	0.4
婚姻状況				
未婚	234	49.5	141	50.9
既婚	239	50.5	135	48.7
母国での学歴				
高校まで	97	20.5	40	14.4
大学まで	257	54.3	215	77.6
大学院	116	24.5	21	7.6
その他	3	0.6	1	0.4
在留資格				
定住者	122	25.8		
実習生	101	21.4		
その他	250	52.8		
居住形態				

一人暮らし	134	28.3	57	2.5
親族と同居	23	4.9	88	31.8
友人と同居	301	63.6	116	41.9
その他	8	1.7	9	3.3
日本での健康保険				
保険証あり	362	76.9	253	91.7
保険証無し	109	23.1	23	8.3

2. 性行為とHIV感染予防

回答者の中で、一般的な健康状態について「完璧」「極めて良い」と回答したのは 353 人(74.9%)と181 人(65.6%)であり、最も多かった。

性的指向性について、ゲイ、レズビアン、バイセクシャルを選択したのは246 人(32.9%)であった。性行為について、過去 6 か月に性行為をしたと回答した者は 561 人(74.8%)であり、その中で複数人(3 人以上)と同時にセックスをしたことがあるのが 266 人(47.4%)、「必ずコンドームを使用していたと回答したのが 100 人(17.8%)であった。特に、回答者の中で、性感染症にかかったのは212 人(28.3%)であった。

HIV 感染予防のためのセックス前の服薬(PrEP)について「よく知っている」と「具体的には知らないが聞いたことがある」と回答したのは491 人(65.5%)であった。その中で、過去 6 か月間に PrEP を服用したのは 145 人(19.3%)であり、今後服薬したいのは 330 人(44%)であった。さらにHIV陽性で現在ARTを服用しているのは 39 人(5.2%)であった。

3. HIV 検査へのアクセス

表2では、沖縄でのHIV検査へのアクセスに関する回答を示した。沖縄ではHIV検査を受けやすいと思うと回答した者はどちらのグループでも50%以上(外国人63.4%、日本人56.3%)であり、検査をどこで受けられるかを知っている者も50%以上(それぞれ57.5%と57%)であり、最も高かった。沖縄でHIV検査を受けたことがあるものは168 人(35.5%)と105 人(37.9%)と高かった。外国人の中で、母国でHIV検査を受けたことがある者は239(50.5%)、日本で無料匿名で受けられることを知っているのは175人(37%)であった。今後HIV検査を受けることに関心がある者は49.7%と51.6%であり、両グループとも高かった。

HIV検査を受けやすくするために重要なこととして、外国人のグループでは「厳格なプライバシー保護」99人(20.9%)「週末に受検できること」93人(19.6%)、「検査施設までの交通手段の確保」79人(16.7%)、「夕方に受検できること」66人(13.9%)、「駅から簡単にアクセス」46人(9.7%)であった。「無料」と「通訳・言語サービス」と回答したのはそれぞれ3.4%と4.8%であった。

表 2. 沖縄での HIV 検査へのアクセス

質問	「はい」の回答	
	外国人	日本人
沖縄ではHIV検査を受けやすいと思う	300 (63.4%)	156 (56.3%)
検査をどこで受けられるか知っている	272 (57.5%)	158 (57.0%)
沖縄でHIV検査を受けたことがある	168 (35.5%)	105 (37.9%)
母国でHIV検査を受けたことがある	239 (50.5%)	
無料匿名で受けられることを知っている	175 (37.0%)	143 (51.6%)
今後HIV検査を受け	235	134

ることに関心がある	(49.7%)	(51.6%)

また郵送による HIV 検査について知っているかと尋ねた時、知らないと答えたのが 505 人(68.7%)であり、その中で外国人 354 人と多かった。またHIV自己検査について、指先から血液を採取する検査を知らないのは 193 人(25.9%)、今後利用したいのが 512 人(70.6%)であった。同様に、唾液による検査について知らないのは 227 人(30.6%)であり、今後利用したいのは 547 人(75.4%))であった。

表3. HIV自己検査

	回答
郵送によるHIV検査について知らない	505(68.7%)
郵送によるHIV検査を利用したい	526(72.2%)
指先から血液を採取する検査を知らない	193(25.9%)
指先から血液を採取する検査を利用したい	512(70.6%)
唾液による検査について知らない	227(30.6%)
唾液による検査を利用したい	547(75.4%)

4. HIV 検査受検の意図に関連する要因

両グループの HIV 検査受検の意図に対して今後 HIV 検査を受検するか否かに関連する要因に関する順序ロジスティックス分析を行った。

目的変数として「今後、あなたは HIV 検査を受けることにどの程度興味がありますか」(全く興味がない、あまり興味がない、どちらとも言えない、やや興味がある、とても興味がある)を採用し、説明変数として、①回答者基本属性に関する項目(年齢、国籍、性別、婚姻状況、学歴、日本語能力)、②性的行為に関する項目(主観的健康状態、性的指向性、複数人で同時にセックスしたことがある、③HIV 検査に関する項目(HIV 感染のリスク、HIV 検査アクセス、検査施設の知識、無料匿名検査の知識、沖縄での受験経験、母国での受験経験)を候補として採用した。回帰分析の結果を表4と表5に示した。表 4 は外国人を対象としたものであり、表 5 は日本人を対象としたものである。分析には統計ソフト Stata ver.17 を用いた。

外国人のグループでは、中国・アメリカ・ブラジル出身者、同性愛者と両性愛者、HIV に少し感染しやすいと思う人、HIV 検査を「どちらかといえば受けやすい」「どちらかといえば受けやすくない」「受けやすくない」人、沖縄での HIV 検査受検経験がない人が統計的に有意となっており、今後 HIV 検査受検の関心を示した。具体的に、中国・アメリカ・ブラジル出身者(OR＝6.18、CI＝1.75～21.81; OR＝4.09、CI＝1.56～10.70; OR＝4.65、CI＝1.34～16.22)はベトナム出身者に比べて、4.09 培～6.18 培、HIV 検査受検の関心を示した。また、同性愛者、両性愛者(OR＝10.01、CI＝4.40～22.76)は異性愛者に比べて 10.01 培 HIV 検査受検の関心を示した。そして、HIV に少し感染しやすいと思った群(OR＝5.95、CI＝2.49～14.18)、沖縄で HIV 検査を「どちらかといえば受けやすい(OR＝3.18、CI＝1.53～6.63)」「どちらかといえば受けやすくない(OR＝4.31、CI＝1.65～11.25)」「受けやすくない(OR＝7.27、CI＝2.48～21.31)」と思う群、沖縄での HIV 検査受検経験がない群(OR＝0.49、CI＝0.27～0.88)とわからない群が(OR＝4.57、CI＝1.49～14.04)、近い将来で HIV 検査受検の意図があるということを示した。他の変数は、HIV 検査受検の意図との間には関係がなかった。

表4. HIV 検査受検の意図に関する要因（外国人のグループ）

変数	AOR	95% CI		p
年齢	0.96	0.91	1.01	0.125
国籍				
ベトナム	1.00			
ネパール	1.26	0.42	3.79	0.684
フィリピン	1.75	0.63	4.88	0.286
中国	6.18	1.75	21.81	0.005**
アメリカ	4.09	1.56	10.70	0.004**
ブラジル	4.65	1.34	16.22	0.016*
その他	1.23	0.29	5.29	0.776
性別				
男性	1.00			
女性	1.38	0.61	3.13	0.445
トランスジェンダー	1.65	0.42	6.53	0.474
婚姻状況				
未婚	1.00			
既婚	1.21	0.63	2.35	0.568
学歴				
中学卒まで	1.00			
高卒	1.31	0.40	4.30	0.658
大学卒	0.80	0.20	3.15	0.748
大学院	0.77	0.08	7.51	0.820
日本語能力	1.00	0.94	1.06	0.996
主観的健康状態				
良くない健康状態	1.00			
良い健康状態	1.00	0.52	1.92	0.996
性的指向性				
異性愛者	1.00			
同性愛者、両性愛者	10.01	4.40	22.76	0.000***
わからない	0.48	0.11	2.15	0.341
複数人で同時にセックスした				
しない	1.00			
したことがある	1.38	0.76	2.50	0.284
HIVに感染しやすいと思う				
まったくない	1.00			
殆どない	1.74	0.79	3.82	0.168
少しある	5.95	2.49	14.18	0.000***
とてもある	3.16	0.94	10.64	0.063
HIV検査を受けやすいと思う				
受けやすい	1.00			
どちらかといえば受けやすい	3.18	1.53	6.63	0.002**
どちらかといえば受けやすくない	4.31	1.65	11.25	0.003**
受けやすくない	7.27	2.48	21.31	0.000***
検査施設				
知らない群	1.00			
知っている群	0.97	0.41	2.29	0.936
沖縄でのHIV検査受検経験				
ある	1.00			
ない	0.49	0.27	0.88	0.017*
わからない	4.57	1.49	14.04	0.008**
日本での無料匿名HIV検査				
知っている群	1.00			
知らない群	0.83	0.48	1.41	0.486
母国でのHIV検査受検経験				
受検経験あり	1.00			
受検経験なし	1.65	0.82	3.34	0.164
わからない	1.06	0.43	2.65	0.893

一方、日本人の中では、HIVの感染リスクに関して、「ほとんどない」（OR＝3.75，CI=1.51～9.29）、「少しある」（OR＝11.98，CI=4.92～29.15）「とてもある」（OR＝7.21，CI=2.47～21.01）と思う群はHIVに感染しやすいと全く思わない群に比べて、HIV検査受検の関心を示した。また、沖縄でHIV検査経験がない群（OR＝2.45，CI＝1.25～4.82）が、近い将来でHIV検査受検の意図があることを示した。

表 5　HIV 検査受検の意図に関する要因（日本人のグループ）

変数	AOR	95% CI		p
年齢	0.98	0.95	1.01	0.254
性別				
男性	1.00			
女性	1.22	0.63	2.36	0.553
トランスジェンダー	1.94	0.34	11.15	0.457
婚姻状況				
未婚	1.00			
既婚	1.44	0.76	2.75	0.263
学歴				
中学卒まで	1.00			
高卒	1.36	0.58	3.17	0.474
大学卒	0.93	0.29	2.98	0.905
大学院	0.12	0.00	3.19	0.205
主観的健康状態				
良くない健康状態	1.00			
良い健康状態	1.30	0.72	2.32	0.384
性的指向性				
異性愛者	1.00			
同性愛者、両性愛者	1.46	0.78	2.72	0.237
わからない	0.72	0.29	1.82	0.489
複数人で同時にセックスした				
しない				
したことがある	1.33	0.64	2.78	0.445
HIVに感染しやすいと思う				
まったくない	1.00			
殆どない	3.75	1.51	9.29	0.004**
少しある	11.98	4.92	29.15	0.000***
とてもある	7.21	2.47	21.01	0.000***
HIV検査を受けやすいと思う				
受けやすい	1.00			
どちらかといえば受けやすい	0.82	0.36	1.85	0.636
どちらかといえば受けやすくない	0.74	0.31	1.75	0.489
受けやすくない	0.96	0.39	2.37	0.935
検査施設				
知らない群	1.00			
知っている群	1.04	0.56	1.95	0.899
沖縄でのHIV検査受検経験				
ある	1.00			
ない	2.45	1.25	4.82	0.009**
わからない	1.74	0.56	5.36	0.338
日本での無料匿名HIV検査				
知っている群	1.00			
知らない群	0.73	0.39	1.35	0.310
母国でのHIV検査受検経験				
受検経験あり	1.00			
受検経験なし	1.65	0.82	3.34	0.164
わからない	1.06	0.43	2.65	0.893

D. 考察

本研究では、2023 年 01 月から 03 月中旬までの期間に、沖縄の在留外国人と日本人を対象として、保健行動やHIV検査へのアクセスの現状及びその関連要因について検討するために、調査を実施した。本調査に参加した者の特徴として、平均年齢は外国人が 31.1 歳と日本人が 34.4 歳であり、既婚の割合が両グループとも 50%ぐらいであった。性別について、外国人のグループでは男性が 68.8%、日本人のグループでは女性が 61.7%を占めた。

回答者の中で、一般的な健康状態について完璧と極めて良い状態を回答した者が外国人グループの 70%以上、日本人グループの60%以上であった。性的指向性について、ゲイ、レズビアン、バイセクシャルを選択したのは35%占めた。次に、性行動について、過去6か月に性行為をしたのは74.8%であり、その中で、複数人で同時にセックスをしたことがあるのが47.4%占めた。一方、毎回コンドームを使用していたのが 17.8%であった。さらに、PrEP を服薬したいと答えたのは 65.5%であり、HIV 陽性で現在 ART を服用しているのは 5.2%であった。特に、回答者の中で、性感染症にかかったのは 28.3%であり、中で外国人が 70%も占めた。この結果から、沖縄の在留外国人に対して性感染症の検査について継続の情報提供が必要となると考えられる。

そして、沖縄での HIV 検査へのアクセスについて尋ねた結果、沖縄では HIV 検査を受けやすいと思うと回答した者はどちらのグループでも 50%以上であり、検査をどこで受けられるかを知っている者も 50%以上であった。また、沖縄で HIV 検査を受けたことがあるのは両グループとも 40%ぐらいであった。HIV 検査を受けることに関心があるものは 49.7%と 51.6%であり、両グループとも高かった。また HIV 検査を受けやすくために「週末に受検できること」「検査施設までの交通手段の確保」が挙げられた。また郵送による HIV 検査について知らないのは 70%ぐらいも占めた。今後、HIV 検査受検を

促進するために、外国人に対して、引き続きHIV 自己検査方法や HIV 検査施設についての情報提供と地方で週末に受検できる HIV 検査会の開催が必要となると考えられる。

次に、今後 HIV 検査を受検するか否かに関連する要因について、順序ロジスティクス回帰分析を行った結果では、在留外国人の場合、中国・アメリカ・ブラジル出身者、同性愛者と両性愛者、HIV に少し感染しやすいと思う人、現在住んでいる地域では HIV 検査を「どちらかといえば受けやすい」「どちらかといえば受けやすくない」「受けやすくない」と回答した人、沖縄での HIV 検査受検経験がない人の間で、今後の HIV 検査の受検希望が高い傾向が見られた。そのため、在留外国人に対して、HIV 感染のリスクが高いグループを中心に、HIV 検査施設や検査についての継続の情報提供が重要であると考えられる。

一方、日本人のグループでは、HIV に感染しやすいと思う人、と沖縄で HIV 検査受検経験がない人が、HIV 検査を受検しやすい可能性も示唆された。この結果から、日本人の場合、若者や未婚の人や HIV 感染のリスクが高いグループを中心に、HIV 検査について情報拡散が必要となると考えられる。

E. 結論

本研究は、沖縄の在留外国人と日本人を対象として、保健行動やHIV検査へのアクセスの現状及びその関連要因について検討した。本調査の結果から、回答者の中で、将来 HIV 検査受検に興味があると回答したのが多かったため、受検割合を向上することが期待される。今後、沖縄における在留外国人の HIV 検査へのアクセスを向上するために、HIV 感染リスクが高いグループを中心に、HIV 自己検査方法やHIV検査施設について効果的な情報提供、地方でアクセスしやすい場所で週末に受験できる HIV 検査会の開催を検討する必要がある。

参考文献

1. 沖縄県保険診療部(2021)「後天性免疫不全症候群(HIV 患者者/AIDS 患者)の発生動向」2021年次報告書

2. 厚生労働省(2021)「沖縄労働局における『外国人雇用状況』の届け状況のまとめ(令和2年10月末現在) https://jsite.mhlw.go.jp/okinawa-roudoukyoku/jirei_toukei/tokei-siryo_00001.html 2022 年 8 月 10 日参照

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

なし

H．知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし